

禅と桃のおいしい関係

こんにちは。

大体お葬式でも前の方がまばらになるんですけど、そういう感じですね。今日は二時三十五分くらいまでということですので、ちょっと短いですけども、よろしくおつきあいの程お願いします。

禅と桃の、先程「優しい関係」とおっしゃったような気がするんですが、「おいしい関係」です。

桃というと桃尻娘なんっていうのもありますので、色っぽい方を想像される方もいらっしゃるかと思うんですけども、そうでもないんで、予めお断りしておきます。

私の住む街は福島県の三春と言いまして、三つの春が一緒に来るということから、そういうふう命名されたとい

禅と桃のおいしい関係(玄侑)

玄 侑 宗 久

われております。

梅と桃と桜がほぼ一緒に咲くんですね。一緒と言いましても梅がちょっと早いです。そして、桜がその後が続いて、まだ梅も桜も散らない内に桃も咲き出すということでもあります。もうちょっと南にいきますと梅、桃、桜の順番ですけど、北の方は梅、桜、桃の順番です。

日本を代表する春の花木が梅、桃、桜だと思えますが、桜は十分にめでられていると思うんですね。皆さんも花見をしますし、あれだけでもらえる木はなかなかない。

「昨日より今日よりも今桜かな」というような句もありますが、元々禅と桜というのはあまり合わないんですが、どちらかという浄土教のイメージ、西行法師がこよなく愛し

禅と桃の美しい関係（玄侖）

たのが桜です。日本人にとつては非常に大事な木であり
ます。

梅と言いますのは道元禅師の『正法眼蔵』に「梅華の巻」
というのがあります、日本人はとても好きですね。

「梅が香や 乞食の家も 覗かるる」。

梅の香が乞食の家にも等しく匂つてくる。割合庶民的な
花というイメージがございまして、どこまでも入つて来る
のが梅の香でありまして、また天神様になつた菅原道真に
は「東風吹かば 匂い起こせよ 梅の花 主じなしとて
春を忘るな」という歌もあります。天神様のイメージでも
知られておりますので、梅もかなり日本人には愛されてい
ると思うんです。

しかし、桃というのはどうも褒め方が足りない。どんな
褒め方がなされているかと言いますと、道元禅師も桃の歌
は詠んでいらつしやいます。

「春風に 綻びにけり 桃の花 枝葉に残る 疑いもな
し」。

この歌からもわかりますように、桃というのは一言でい
えば無邪気、天真爛漫、疑いのない心というわけですから、

ある意味では無垢ということでもあるだろうと思います。

梅とか桜は非常に褒めたたえる歌も言葉も多いんですけ
ども、桃は禅と非常に深い関係にありながらなかなか褒め
る言葉が少ないということで、あえて今日は禅と桃の關係
を取り挙げてみたわけです。

単純化して申しますと、梅というのはどちらかという
苦勞すればする程、寒ければ寒い程強い香を放つというふ
うに考えられておりまして、また剪定するのは梅だけで
すよね。

「桜切る馬鹿 梅切らぬ馬鹿」と申しますが、剪定——つ
まり基準に合うように整えていく。これは一言でいいます
と儒教的であります。頑張つて枝ぶりを整えて、形もよく
なつてみんなに好かれる姿になろうというような考え方が、
そこには感じられます。

桜は、元々桜という音が「さ」というものが降り立つ場
所、「座」と書いて「くら」と読みます。これは折口信夫の
説です。

「さ」というのは何かと言いますと農業の女神です。農業
の神様を古い時代に「さ」と呼んだわけです。

そうして「さ」がいらつしやつたというんで、田植えをする、畑を耕す、ということがおこる。農業の女神の命を受けて田んぼに稲を植えるのが早乙女であります。「さ」の乙女ですね。

時々この農業の神様というのは機嫌が悪くなる。乱れるわけでありまして、それを「五月雨」と呼んでおります。桜というのは、この「さ」という農業神の降り立つ場所というふうに崇められておりますから、非常に神に近い。

梅というのは先程申しましたように儒教となじみがいい。そして桜だけが日本の木であります。

梅も桃も中国から入って来た木でありまして、梅は中国のどちらかというと北部、つまり儒教圏の木であります。桃というのは中国南部、江南地方というような呼び方もいたしますけど、南の方から入って来た。これはどちらかという道教圏であります。

道教では、三千年に一回しかならない桃の実というのがあります、これを食べると不老長寿が得られるというふうに信じられています。ずうつと信じていたんですよ、中国人は。不老長寿というのは可能なんじゃないかという

—— 禅と桃のおいしい関係（玄侑）

ことを十九世紀までは信じていましたね。最近はどうも死なないというのは無理みたいだと気づいたみたいですよ。

陽貴妃にいたしましたも、不老長寿のものをいろいろ家来に捜させて食べたり、体に塗ったりということをやつてみたいですね。私の行ってました大学にも、陽貴妃がつけていた白粉を再現して作っているという先生がいらつしやいまして、その方は白粉だけじゃなくて、どんなに高い所から飛び降りても怪我しないようになる技術というのを磨いてまして、最初一メートルくらいから始めるわけですね。

翌日は一メートル十センチ、段々段々高い所から飛び降りていくんですけども、毎年その教室からは怪我人が出て学生が骨折したとか、そういうことがありましたけども、あの先生もどうも不老長寿というのを信じていた節があるんですね。

桃には、そうした不老長寿という側面があるわけですが、ご存じの桃源郷というのもまた桃畑の先にあつた。仏教でいう極楽であります。

禅と桃のおいしい関係（玄侑）

『桃花源の記』というのを陶淵明とうえんめいが書きましたが、これは実際にあった落人部落みたいですね。

中国に、始皇帝という皇帝のいた秦という国がありますね。あの秦の民族が山奥に住んでいたらしいんですね。それが六朝時代になって、平家の落ち武者みたいに住んでいるのが発見された。そこが非常に素晴らしい所だったという話のようです。

桃源郷というのも桃のあった所であります。

桃は、道教と密接に関係しています。皆さんは、あまり道教の跡形というのを今具体的に感じることは少ないだろうと思うんですが、当初日本が国を整備するのに使った概念というのは主に道教のものだったわけですよ。

例えば、八色姓やくさのなかばねという役職がありますけども、その中に何とかかんとかの真人まひとという位があります。真人というのは老荘思想の荘子の言うところのシンニンでありまして、完全に道教の言葉ですよ。

あるいは、今神社と呼んでおりますけども、神道のあの神社ですね。神社というのも道教用語。それから、三種の神器というものがありますが、これも道教用語ですよ。

本当に道教というのは、初期の仏教成立の時にも非常に影響を与えております。例えば衣の色つてありますね。

曹洞宗の場合にはトップの方というのは黄色ですよ。一般の方が考えてどの色が偉いのかなというふうに思った時に、まずどの宗派にも共通するものとして紫色というのがあります。

聖徳太子の定めた冠位十二階でも、紫色が上位なわけです。これは、まさしく道教の考え方でありまして、紫を高くと見るのは道教です。ところが道教というのは、国家の概念を作るのには非常に不向きな個人的な教えであります。ですから、後に儒教が被さってくる。儒教は紫色が大嫌いなんです。紫は下品だろうというのが儒教でありまして、儒教が大好きなのが黄色とか緋色なんです。

ですから、臨済宗も曹洞宗もそうですけども、紫色の上うへに緋色の衣とか黄色い衣とかが乗っかってきた。

これはまさしく道教的な影響の上に、儒教的なカラーが被さってきたということがはつきり見える事柄であります。

そういうわけで、儒教が後に非常に強く被さってきますので、道教的な禅のカラーというのが桃を初め段々なくなっ

てくるんですね。

禅語のなかで、桃が出てくるものと言いますと「桃花春風に笑む」、桃の花が春風に微笑んでいるというようなものがあります。そのくらいでしょう。ほとんどないんですね。

禅というのは達磨さんが崇山に籠もって始まったとされているわけですが、この崇山というのは元々道教の聖地でしたから、道教の影響を非常に強く受けているはずなんです。ところが、それが時代が下ってまいりますと桃が排除されてどんだん梅になっていく、道教が排除されてどんだん儒教的になっていくということが起こるわけでありま

す。古い時代に桃が非常に珍重された例をお話し申し上げたいと思います。

中国では、昔から三月初めの巳みの日に水辺で身を清めるという習慣があったそうですが、これが日本に取り入れられてまして七〇一年、文武天皇が「曲水の宴」というのを開いた。曲りくねった水辺で宴をするんですね。その時に、これは『蜻蛉日記』に書いてあるんですけども、桃花酒を飲んだとあります。桃の花を浮かべたお酒を飲んだそうで

禅と桃のおいしい関係(文俚)

す。

桃の花を浮かべるなんて、お洒落だなと思われるかもしれませんが、そういう簡単なものじゃなくて、桃というのほもうちよつと深い意味があります。例えば、皆さん、お寺でお札というのがありますよね。お札というのはお寺でも神社でもあります。お寺でも神社でもあるものというのは大体どこから来ているかと考えますと道教から来ているのが多いんですね。お札というのは元々道教の道具。お守りとかも道教が考案したものです。

ですから、神社とお寺の両方に置かれていたりするわけですが、元々お札のことは桃符という。なぜかと言いますと、お札というのは桃の木で作ったんです。しかも桃の木の東側の枝で作ったのが本格的な桃符であります。

何でそんなに桃に拘ったのかということになるわけですが、日本の場合には『古事記』の中にイザナギが奥さんのイザナミに先立たれた話が出てきますね。黄泉の国に行っちゃった奥さんを追いかけてどんだん行きますよね。

黄泉の国というのは土の中です。どんだん追いかけて行くというのは、つまりとうとう腐乱した遺体を見てしまう

わけです。

元の夫ではあっても、この顔を見られたからには返してなるかということになりまして、追いかけて来るわけです。どんどん逃げる。イザナギは逃げる。イザナミが追いかける。そして、途中いろんなものを投げるんですね。投げつけるんです。イザナミに。山ぶどうとかいろんなものを投げると山ぶどうを食べている間だけ時間が稼げる。それでも、まだしつこく追いかけてくるので、最後にイザナギがイザナミに投げつけたのは桃三個です。

桃三個でイザナミは諦めたんです。

というのは、この桃に特別な力があるというふうに思われていたからであります。

その特別な力というのは何かと申しますと、先程「枝葉に残る疑いもなし」という道元禅師の歌を紹介しましたけれども、無邪気という言葉で申しました。邪気に対して一番対抗できるのは無邪気なんだという考え方でありまして。邪気に対して邪気に対応するというのがアメリカとイラクのようなものでありますけども。この邪気が一番弱いのは無邪気さなんだという考え方なんです。

禅語で「瞋拳も笑面を打せず」という言葉があります。シンケンというのは怒りの拳です。怒りの拳も笑った顔は打てない。これは、こつちをすつかり信じ込んでいる無邪気な人は殴れない、ということですね。怒りも萎んじゃうわけです。

これが、日常生活でできたらどんなにか素晴らしいだろうと思うんですね。しかし向こうが怒ってくるとこつちも怒っちゃう、というのが普通でありまして、どんどんそれがエスカレートしていくわけです。

平安時代、この桃が邪気を払うというのは一般人の常識にまでなっております。例えば『延喜式』という本には、大晦日に「鬼遣らい」という行事をしたことが出ています。「追^つ雛」という言い方もしますが、この日には鬼をやっつけるために桃の木で作った弓と韋で作った矢を持つ。そして、桃の木の杖を手にして鬼を追いかけたとあります。また『今昔物語』から類推すると、死者を出すと陰陽師^{おんみょうし}が鬼が来るといつて脅したわけですね。

鬼というのは何かというと、中国語では死んだ人のことを言うんです。死者は全部鬼なんです。

「魂」という字があるでしょう。魂という字には鬼が付いているでしょう。左側に云と書きますけど、あれは雲です。亡くなった死者の中で空に上っていくものが魂なんです。「たましい」というのはもう一つ字がありまして、左に白いと書きますと「魄」。これは「ハク」と読みます。これは死者の中で骨の白い所に残るものこれを言ったわけですね。いずれにしても鬼というのは亡くなった人のことだったんです。

亡くなった人は、どっちに行っちゃうのか、というと、丑寅の方角だと言うんですね。丑寅といいますと北東ですね。よく鬼門と言いますでしょう。鬼門というのは鬼の門です。鬼の門というのは死者がそっちから出入りするということでありませう。

亡くなると鬼になる。それが、丑寅だというもんですから、牛の角を付けて寅のパンツを履かせたというのが日本の鬼の基です。ああいう鬼を日本人が造形したんですね。鬼というのは完全に元は死者のことです。

その亡くなった人が出ますと鬼が来るぞと言って陰陽師なんか脅したわけです。

禅と桃の美しい関係(玄侑)

その時にどうしたかと申しますと、門の所に桃の木を大量に切つて来て、門を塞げ、ということをやったんですね。桃の木がそこにあると鬼が入れない。邪気が入れない無邪気。それが桃の木だったわけです。

これが発展して、「桃太郎」という話ができるわけです。鬼をやっつけに行くのはなぜ桃太郎なのかというと、桃にそういう力があるからなんです。

私が修行をしておりました天龍寺という所は、大きな方丈があるんですけども、方丈の屋根の屋根瓦、普通は鬼瓦をするでしょう。あれは鬼に対抗するために鬼を置いてるわけです。アメリカとイラクと一緒なんです。

しかし天龍寺では、屋根瓦の上に桃があるんです。鬼は置かない。

そういうのが昔はあったんですね。最近桃のすごさというのが全く忘れられているという気がするんですけども。

中国の方に行きますと、中国の一番古い国であります殷の遺跡から、桃の種が大量に出土しております。あの時代から桃は沢山食べられていた。

日本人の場合は桃というと花なんです。どつちかとい

禪と桃の美しい関係(玄侖)

うと。中国人の場合は、桃と言いますとあの実なんです。

「桃李 ものいわざれども 下自から 径をなす」という言葉がありますが、桃や李の下には人が大勢集まりますという言葉なんですけど、花が綺麗だからじゃありませんね。桃と李の実がおいしいからなんです。

殷の後の周の武王が戦をやめるぞという時も「馬を桃林の野に放す」ということを言っております。桃林というのは桃の林であります。

ですから、戦に使っていた馬を桃の林に戻す。つまり桃というのは平和の象徴でもあるわけです。

周の時代に沢山書かれた詩を集めたのが『詩経』という本であります。これをまとめたのが孔子ですけども、その中に、皆さん多分ご存じだと思いますが、「桃の天々たる灼々たりその花。その子嫁げばその室家によるしかろう」というような歌があります。

若々しい桃のような娘。桃の天々たるという言葉でずうっと続くんですけども。とにかくいい娘だということを言いたいわけですね。『詩経』独特の修辭法でありますけども、言いたいことを言うのに、まず自然描写を最初に持って来

る。そこに「桃の天々たる」という言い方が出てくるわけです。若々しい桃のようだと。その女の子を褒めたいんですね。

どういう女の子なのかと言いますと、その詩をよく読んでみますと実が大きい。多分、胸もお尻も大きかったんじゃないでしょうか。それから、茂った葉。葉がよく茂っている、ということは、ちよつと毛深いということでしょうかね。つまり、強い生命力を感じさせるんでしょうね。

無邪気で天真爛漫であるという少女のあり様が褒められているんですね。

こういう女の子が嫁げばその嫁ぎ先は恐らく幸せになるだろうということが歌われているわけです。

これは、皆さんよくご存じの儒教的な考え方からすれば、とんでもないでしょう。無邪気ならいいというもんじゃないでしょう。儒教は礼の教えですから。礼儀作法を学んで、お茶もお花もやっていなければいけない。そういう女の子じゃないと嫁いであらうまいかなんじやないかというふうに考えるのが儒教なわけです。「仁義礼智信」という五徳(五常)を大事にするんですね。

しかし老荘思想から言わせれば、仁義なんていうものは本来の道が廢れたからそんなもの煩く言わなければならぬいんだと考えます。「大道廢れて仁義あり」と、『老子』には書かれております。大道が廢れたからこそ仁義が盛んになってくるということであります。

心が亡くなったから礼儀を必要とすることになってきた。桃の世界というのはそういう礼儀とか仁義とかそういうものが生まれる前の無邪気で優しいそういう女の子なら、さぞかしいいだろうなと言っているんですね。大事なものは礼儀作法ではなからうと。そういう世界であります。

先程日本では桃が描かれるのはほとんど花の方だと申しましたけども、日本で桃が描かれた最初は、恐らく『万葉集』の中の大伴家持の歌であります。

「春の苑 紅匂う桃の花 下照る道に いでたつ乙女」というのがあります。

紅匂う真赤な桃だったんですね。真赤な桃に日が差している。その桃の花を透かして、太陽の光が下を照らしているんですね。乙女の顔をほんのり赤く染めているという景色であります。

禅と桃のおいしい関係（文俣）

ですから、礼儀作法とかそういうのじゃないんですね。本質的に生命そのものを称えているという世界が感じられます。

当初出てくる桃というのは日本においては花なんです、今申しましたように。

大伴家持に出した大伴家主の手紙というのもあります。「桃花^{まふた}暎を照らして紅を分かち」という言葉が出てきますけども、桃の花と太陽の光が混ざって目に届いて非常に美しいという様子だと思います。

ところが日本にも、やがて実を食べる桃が入って来ます。この、実を食べる桃の代表が蟠桃^{ばんとう}といえます。パントウって、旅館の番頭さんじゃないですよ。虫編に一番、二番の番と書きます。蟠^{わだかま}るという字です。

パントウのトウは桃ですね。なんで蟠ってんのかと言いますとひとつづぶれているんです。桃太郎の桃みたいにすんなりした形じゃなくて、ちよつと潰れた形なんです。扁平なんです。これを持って来たのが禅宗の坊さんです。

妙心寺という、京都のうちの本山ですけども、その妙心寺の山内には蟠桃院というお寺があります。この桃に縁の

禅と桃のおいしい関係（玄僧）

お寺であります。

だから、禅というのは桃と元々非常に深い関係なんですね。

蟠桃というのは別名「坐禅桃」とも言います。結構毛が生えた桃です。桃で毛が生えてないのをネクタリンと言います。

禅と言いましても大まかに言いますと二つの禅があるんですね。

初祖達磨さんに起こった禅が、二代、三代、四代、五代ときます。五代から六代に移る時に代表的な弟子が二人でさるんです。一人は非常に優秀な弟子だった。その名も神秀と言います。神のように優秀だと書きます。一方、ウソかホントかわかりませんが、その道場には無学文盲だったといわれる慧能という弟子がいた。無学文盲だという割には「金剛経」の言葉を聞いて修行をしようと思った、と言われますから、無学文盲ということは無いと思うんですけども。後に六祖になる慧能と神秀という二人の方がいらっしやっただんですね。

この二人が、ものすごく家風が違うんですね。禅という

のはこの二手に分かれるわけです。

神秀という人はどういう人だったかと言うと、瓦を毎日磨いていればそのうち鏡になるだろうという、極端に言うとうるさい大変な努力家です。毎日毎日とにかく真面目にやっけないとお悟りは開けないんだというふうに考えていた人であります。

師匠の五祖弘忍くんにん大満という方が自分の今の心境を漢詩にして貼り出しなさいと弟子に言うんですね。

そうすると、この神秀は非常に素晴らしい漢詩を張り出すわけがあります。ご存じの方もいらっしやると思いますが、

どういふ歌かと言いますと「身はこれ菩提樹　心は明鏡台のごとし　時に努めて払拭し　塵埃を惹かしむることなかれ」というんですが、つまりこの身は菩提樹のようなものであると。お悟りを開く木ですね。心は鏡のようなものだと。鏡に塵が着くでしょう。塵、埃が。それを毎日綺麗にする。そうすると埃が着かない素晴らしい心ができ上がるということを言ってるわけです。

それに対して、さつき申しました六祖慧能という方、こ

の人は正式な修行僧というよりも台所の手伝いで、毎日石臼で米を搗いでいたといわれる人です。その人が、しかし老師から見ると、本質的なことをわかっているという詩を貼り出したわけですね。さっきの神秀に対抗して貼り出した詩は、いちいち神秀の詩に逆らっていました。

「菩提もと樹なし 明鏡もまた台にあらず。本来無一物。何れの処にか塵埃を惹かん」。

実はこれ、菩提樹だというけれど樹木なんてどこにあるんだと。心は鏡だというけども、そんな鏡台みたいなものを抱えているわけじゃないだろう。本来無一物なんだし、一体どこに埃が着くというのか、というふうに言っているわけです。

この二人の家風の違いで、即ち北宗禅と南宗禅というものに分かれるんです。

神秀の毎日埃を払いましょうというのは北宗禅、儒教的な禅です。戒律を重視する戒律禅というものになります。これは、日本には伝わってきておりません。韓国なんかで時々大騒ぎする禅僧たちいるでしょう。曹溪宗って言うんですが、あの人たちは北宗禅です。日本にはついぞこの北

禅と桃の美しい関係(玄侑)

宗禅というのは伝わらなかつたんですね。梅的な禅は伝わらなかつた。

日本に将来されたのは、この六祖慧能の系統でありますから、「本来無一物、何れの処にか塵埃を惹かん」という、そういう禅であります。これを南宗禅と言います。

ところが、その南宗禅として伝わった禅が、段々段々儒教化したということを私は申し上げたいんですね。

つまり、どうしても江戸時代というのは朱子学が国家の学問になつちやうわけですから、儒教的な価値観に逆らつてはなかなか生き延びられない。ですから、元々桃の無邪気さをめぐるような禅であつたわけですけども、礼儀作法を大事にするという、どちらかというとな儒教的なものに変質していくということが起ります。

桃の無邪気さということを上上げていくわけですが、『老子』という本には、「笑わざればもつて道となすに足らず」という言葉があります。素晴らしい道、本質を言いあてた道というのは、真面目な顔をしているもんじゃないんだと。聞いたら笑つちやうようなものなんだよということを言ってるんですね。

老荘思想というのは非常に子どもを尊びます。老荘が一番理想とするのは「柔弱」ということで、柔らかく弱いということがじつは最も強いことなんだというふうに考えるわけでありませう。

これは乳幼児のあり方ですね。そこに我々も回帰できないか、というふうに考えるのが道教であり、その道教の上に乗ったのが本来の禅、とりわけ南宗禅であったわけです。

人は成長しますと頭を使ってものを考えるようになる。言葉や論理を使ってものを考えるようになる。これは、分別といわれます。「幼な子の 次第次第に智慧づきて 仏に遠くなるぞ悲しき」という歌もありますけども、子どもの頃は無邪気でよかったです。

例えばまんじゅう一つの皿とまんじゅう二つの皿を子どもに出します。そうすると最初迷わずに二つ乗った皿に手を出すんですね。この時に、社会心理学の方では「もの心がついた」と言います。もの心がつくというのはそういうことです。

ところがしばらくすると、本当は二つの方が欲しいんだ

けども、気を使うんですね。気使いが始まる。どっちにしようか迷うようになる。これを「知恵ついた」と申します。こうして知恵づくことで本来の無邪気さがどんどん失われていく。そこに理屈が絡んできて、理屈づけをしてくるわけですね。

一つを取る方が今度は礼儀になってくるわけでもあります。本当は二つ欲しいだろうと。そこに戻れないものならどうしようという発想が道教とか禅にはあります。ですから、人が成長に伴って身につけていく分別に對しまして、禅が重視するのは「無分別」というものなんです。分別する以前の状態です。無分別とはどういう状態か、なかなかわかりにくいかと思うんですけども、無分別という言葉で思い出しますのは、私が修行していた道場である天龍寺の、私の師匠の師匠のことです。私が道場に入った頃は、まだ健在だったんですね。毎朝毛糸の帽子か何かを被りまして、自転車で山内を散歩されるんです。

入門した当初は、私はその人が誰だかわからない。どこかのおじいちゃんとか思っていないわけですよ。箒で掃いてますと「おはようございます」と、向こうから言ってくる

ださる。「おはようございます」と応えます。

これは後で聞いた話なのですが、毎朝決まったコースを決まった時間に散歩してますと、ある場所で必ず同じ男性に会ったんだそうです。毎朝「おはようございます」と管長さんが声をかける。ところが返事しないんですね。

毎朝あいさつをして返事しない相手に、皆さん何日あいさつし続けられますか。

たいてい学校ではあいさつしなさいと言うでしょう。これ儒教的です。あいさつって自然発生的なものでありますから、しるって言われてするあいさつなんか、あいさつじゃないと私は思ってるんです。

しかし、自分がいさつをして相手が応えないという状況が続いた時に、一体何日続けられるだろうかと思うんですね。そりゃいろいろ分別しちやいますよ。分別した挙げ句に説教し始める人が多いわけです。

しかし、この関牧翁老師という管長さんは、毎朝あいさつを返さない相手に、二年間あいさつを続けたそうです。

その二年後に何が起こったのかというと、ある朝その男性が初めて「おはようございます」と応えて、その場に泣

禅と桃のおいしい関係(玄侷)

き伏したんだそうです。何が起こったのか詳しくはわかりません。しかし、そこで大きな変化がその方の中に起こったことは間違いないと思います。それは、きつと「あいさつをしなきゃ駄目じゃないか」と説教されることでは起こらなかった変化だろうと思うんですね。あいさつをしない相手に、二年間毎日あいさつができるという、そういうことは無分別じゃないとできないわけです。

あるいは、私の友だちのアメリカ人でマーチンという男がいました。早くに父親を亡くしまして禅の修行がしたいと言って日本にやって来ましたが、道場に入る前にちよつと日本の生活に慣れるために、神戸のお寺にいたわけです。

そこでは毎朝お粥なんです。お粥って、アメリカ人にすれば何とぶがいない食べ物だろうと思うわけです。せめて牛乳を入れれば食べられるじゃないかと。彼は袂に紙パックの牛乳を持って来てお粥にこそつと牛乳を入れたんですね。そしたら、住職さんがたまたまそれを見つけてしまった。見つけた時に、その和尚さんは大笑いしたんです。わっはははと大笑いしたんですね。大笑いされると大体やってもいいのかなと思いませんか。

禅と桃の美しい関係（玄侖）

翌朝も彼は、また牛乳を入れたんです。翌朝も、また大笑いするんです。次の日も、その次の日も毎日毎日彼は入れ続けた。その和尚さんは毎朝同じように笑い続けたんです。

これ、できますか。大概分別のある方は、もう何日だ、二週間もあいつ黙っているからいい気になりやがってと、日にち数えるでしょう。最初は笑った人間もその初心を失っていくんです。どんどん大脳皮質でいろんな分別をしていくんですよ。あいつばっかり認めていたんでは他に示しがつかないだろうとか。

最初おかしかったわけでしょう。おかしかったという初心を保つことは、無分別じゃないとできないんです。これは梅じゃないんです。桃の世界なんです。

変な言い方かもしれませんが、キリスト教の方ではエデンの園に昔はみんないたと言うわけですね。アダムとイブがそこにいたわけです。しかし智恵の木の実を食べてしまった。りんごを食べてから罪を知ってしまったというわけですね。罪ある人間がいかに上手に暮らしていくかという考え方がキリスト教です。これはじつは儒教にも共通してます。だから仁義や礼が大事になる。

一方、老荘思想とか禅は、この智恵の木の実を食べる前の状態に戻れと言っているわけですね。そして、そういうふうになることは、恐らく可能なんです。毎日お粥に牛乳を入れるのを見て毎日同じように笑える人がいるんです。

一瞬阿呆かと思うでしょう。だから、大愚良寛という方が曹洞宗にいらっしやいますよね。大馬鹿に見えるんですよ。無分別というのは。

桃がそういう考え方であるのに対して、梅というのは段々蓄積していつて進歩していくという考え方があります。若い頃はどうしようもないわけですよ。梅の木だって。老木こそ素晴らしいんですよ。ごつごつして曲りくねって、そこに花が咲くというところがいいわけでしょう。剪定してこういうのは邪魔だといって切っちゃって、いい木にしていくというのが梅の木の育て方なわけですね。

教育というのはある意味でこの剪定がなくてはいけないだろうと思います。生命力の向かう方向があちこちばらばらでは、このエネルギーが十分に生かせない。ですから、エネルギーの向かう方向を一つに絞っていくという意味で、剪定というのは必要だろうと思うんです。儒教的な梅的な

考え方の中には、人間が段々完成していくという考え方があります。段々よくなっていく。子どもは、まだ子どもなんだからお前にはわかんないだろう。まだ小学生じゃわかんないだろう、中学生は、まだ子どもじゃないかというわけです。

しかしそうなると、いったいいつが最高なのかと。

ずうっと待っていたら、もうボケちゃったからわかんない、なんてね。いつのまにかピークを通り越しちゃったということになる。じゃあ、いつが最高なのか。

非常に難しいところでありませうけども、孔子先生に言わせれば三十にして立つ。志を持って身を立てるわけですね。四十にして惑わず。五十にして命を知る。自分の立てた志が天命にかなっていったと自信を深める。そして、六十になると耳順、反対意見を言われてもそれ程腹が立たない。この辺が全盛期でしょうかね。

七十になると従心。心の欲するところに従って、しかも規を越えずと言いますが、それじゃちよつとエネルギー不足じゃないかと思うんですね。そのとおり、孔子先生は七十四で死んじゃいます。

禅と桃のおいしい関係(玄侑)

段々よくなつてやがて衰えるという、そういう考え方ですと、そのくらいまでしか保たないんじゃないですかね。

一方、老子は百五十まで生きたといわれています。もつと長かったという人もいます。ですから、人生の描き方が全然違うんです。儒教が段々よくなつて、また段々衰えていく。これ欧米人の考える人生と一緒です。しかし、道教、老荘思想では、大体五歳がピークだという一派もあるんです。その場合は、つまり大人というのは最低の状態ですね。

柔弱でもないし。しかし年をとるともう一度最高のときがやってくるんです。だんだんほどけてまた五歳に近づくんですね。しかし年齢で区分するよりも、禅では常に今が最高だと考えます。例えば今七十六歳だとしますと、今が最高なんですよ。なにしろ七十五年も待ってたんじゃないですか。今が最高のはずですよ。いつでも最高というんですね。

だから、どこがピークかということで考えたら今の自分がピークなんですよ。丸い地球の上に立っている。どこに立ってても地球のトップに立ってるんじゃないですか。そういう考え方を禅ではします。分別というのをできる

限り捨ててゐるわけですね。

我々は大学で何を学んでいるのか、というと、主に分別だろうと思うんです。皆さんは地球が太陽の周りを回っているということを知ってますよね。しかし、地球が太陽の周りを回っているということを皆さんは実感できませんか。

例えば、今私は、そういう意味では秒速三十メートル以上の速さで移動をしてるんですよ。地球が回っているスピードで動いているんでしょう。みんな動いているから動いてないように感じているだけです。しかし、そういうことは実感できませんでしょう。地球が太陽を回ってるなんてことは、本当に分別なんです。

実感としては太陽が地球を回っているに決まっているじゃないですか。それでいいんじゃないですか。皆さんの実感の方を重視する。天動説でいいんですよ。だって太陽が回ってくれてるでしょう。私は宇宙の中心にいるんです。宇宙の中心で坐禅するんです。

そこが、まだ分別が起こらない世界なんですな。

大学という所は分別を学ぶ所でもありますから、分別と無分別の兼ね合いが非常に難しがるうと思えますけども、

無分別も忘れないでいただきたいと思えます。

桃というのは無邪気と申しましたけど、言ってみれば影がないんですな。苦勞を売り物にしない。梅って苦勞を売り物にするところがあるんですね。寒ければ寒い程強い香を放つと言うでしょう。寒ければ寒い程、だから苦勞すればする程後でいいことがあると考えているわけです。

苦勞すればする程、後でいいことがあるんだよと思っていて大地震で死んじゃったりするんですよ。あの苦勞はどうなつたんだらう、ということになる。だから、大地震で死ぬということはどう考えるか。

例えばキリスト教では、大洪水が来てノア夫婦だけが生き残った。これに理屈つけるわけでしょう。ノアが最も信心深かったから生き残ったんだ、というわけですよ。

あの理屈で言われると大地震で死んだ人はそれなりの理由があるということになるでしょう。どこか行いに悪い所があつたんだらうと。

隣のおじいさんは生き残って、うちのおじいちゃんは死んじゃった。うちのおじいちゃんは意地悪だったんだらうか、というふうに、単純に因果律で考え易い。そういう思

考の構造を儒教とかキリスト教は持つてます。

しかし、老荘思想は「天地は仁ならず」という一言で言っ
てしまいます。

あなたがいいことをしてた、悪いことをしてた、そうい
うことと自然現象は関係ないと言うんです。死ぬのも生き
残ったのも偶然ですよ。いいことをしていれば自然災害に
遭わないなんてことはないわけです。だから、いつ死ぬか
わかんないんですよ。どんなに素晴らしいことをやってい
ても。

ということとは、将来にいいことが起こるために努力する
というんでは報われない可能性が強いということです。ど
うしたらいいのか。将来に貸しを残さない。今、満足して
しまうことなんです。

どういうことか。例えばその辺ちよつと雑巾がけをして
くれと言われますよね。何で私がやんなきゃならないんだ
ろうと思いつながらやっている。我慢してやっている。これは
やっぱり、精神衛生上もよくない。

禅をやると、そう思いつながら雑巾がけなんかやらないよ
うになるわけです。どうせやらなければならぬならば、

禅と桃のおいしい関係(玄侑)

それを自分の樂しみに変えていくしかないでしょう。雑巾
動かしながら自分の筋肉の動きに意識を向けていくとか、
それに呼吸を合わせていくとか、自分のやり方に変えてい
くわけですね。

言われてやるということは世の中に生きていると起こり
ますよ。しかし、言われて嫌々やっているのは絶対体によ
くないですよ。そうではなく、その場から十分結果として
の樂しみももちゅうんですよ。そうすると、後々、将来
に貸しはないですからいつ死んでもいいじゃないですか。

よくお通夜なんかに行くと、もう定年でようやくこれか
ら樂しい時が始まると思つてたのに、とみんな言うわけだ
すね。そんなことを言つてたら、そんな時はいつになつて
も来ないですよ。今日の分の樂しみは今日もちゅうちゃわな
いと。今日は我慢してやつたというのは今日を冒瀆しちゃう
たようなもんですよ。いやー、いい一日だった。このまま
死んでもしょうがないなと思いつながら、毎日枕に頭を持っ
ていくといふとこまでいくと、大変なもんであります。

それは道元禪師のおつしやつた「修証一等」ということ
であります。修行と悟りは一つで等しい。悟るために修行

禅と桃のおいしい関係(玄侑)

をするんじゃないと言ってるわけですね。修行そのものが悟りだと言っているんです。それはつまり、結果を後に期待して今を我慢するわけじゃないということでありまして。今やっていることから楽しみもそっくりいただいてしまうんですね。

これの達人が観音様という方なんです。あの人は何をやっても遊びとしてやっていますから。道元禅師や観音様に学んでいた方がいいことでもあります。

梅が正しさを主張するのに対して、桃というのは楽しさを主張しています。

よく心配症の人なんかが今の心配事がなくなったら、きつと私も楽になるんじゃないかと言って心配している人がいますよね。でも、心配の種ってなくならないってご存じですか。絶対なくなりませんよ。心配症の人は一つのことが終わったら、必ずあつという間に次の心配の種を捜してきます。そして、必ずそれは見つかります。

うちの息子はいつになったら学校真面目に行くんだと心配していた人が、段々いつになったら結婚するんだ。結婚したら、いつになったら子どもができるんだ。子どもがで

きても、子どもの成績まで心配するんですよ。心配症の人って心配するのが趣味なんですな。

だから、心配の種は決してなくなりませんから、心配するか安心するかは、たった今どっちかを選ばなきゃいけない。心配する人はずうっと心配してます。安心する人はそこで安心できるんです。安心に条件付けたら駄目ですよ。息子が、はたちになったら安心する、なんてことを言っているとずっと安心できません。たった今安心するんですな。

これが桃の無邪気さでもあり、頓悟なんです。皆さんもご存じの言葉だろうと思いますけども、蘇東坡そとうぼという詩人が、「柳は緑 花は紅」と言った。この考え方も老荘思想の上に乗っかっている陶淵明の延長に来るわけであります。

柳は緑で、花は紅。何だそれは。普通それだけじゃ意味通じないでしょう。田中君は優しくって鈴木君は勉強ができると言ってるだけでしょう。分別しないとそういうふうになるんですよ。

でも皆さん分別しますから、田中君と鈴木君はどっちが頭がいいの、どっちが優しいの、と聞くんですね。それは

分別なんですよ。

柳は緑で綺麗だな、桃の花は紅で無邪気で美しいなと、直接感じたことが並列されているだけなんです。

田中君は優しいな、鈴木君は何と頭がいいんだろう。二つ並列して、それでいいじゃないかと言ってるんです。

どっちが頭いいの、どっちが優しいのって、他人との比較で考えるなよ、と言ってるのが禅なんです。

その人の魅力が直接ドーンと伝わってくる、それが優しさであつたり、頭のよさであつたり、いろいろなんです。鮮やかな緑であつたり、綺麗な紅であつたりするわけであります。

比較も分別もしない世界。それが桃の世界なんです。無邪気さ、無分別の世界なんです。

本当はもうちよつと用意してきたんですけど、教室の移動があるということでありますので、この辺で終わつた方がよろしそうなので終わらせていただきますが、今の「柳は緑 花は紅」ということをもつとわかりやすい言葉で言いますと、家風を認めるということです。

例えば、子どもが鼻たらししている。鼻たらししてはいけ

禅と桃のおいしい関係(玄侑)

ませんよ。チーンとやりますよね。そういう教育は必要であります。

でも、五十歳の人が鼻たらししていたらどうしますか。ああ、そういう人なんだなって思いませんか。そういう人っているわけですよ。それは家風として認めるしかないことであるんですね。ちよつと大変な家風ですが。

教育してこういうふうに住立て上げていこう、剪定していこうという梅の発想と、そのまんま受け入れて認めよう、家風を認めようという桃の発想と、両方必要なんです。むしろ、桃一辺倒では社会生活はうまくいかない。梅も必要です。

しかし、人が幸せになるのは梅じゃないんです。桃的になつた時なんです。笑つた時なんです。無邪気になれた時に幸せを感じるんですね。そういうわけでありますので、これから桃を見たらそういうことを思い出しながら、笑つただければ幸いです。

どうも長時間にわたりありがとうございます。